



木造地藏菩薩坐像



木造地藏菩薩立像

構造は、頭から体まで一材で彫出する。内刳は施さない。さらに結跏趺坐する脚部は、別に一材を刳いでいる。現在失われている両手及び袖口部は、それぞれ別に材を脚部材の上に刳いでいた。比較的単純な構造である。そして作風もまた、素朴なものである。体軀の造形は体の奥行が薄く、脚部とともに偏平な感じを受ける。衣の襷の彫出も浅く、直線的に処理されている。

この像は、もと真名畑村荒屋の十王堂に安置されていたと伝える。十王像とともにまつり、地獄からの救済を祈ったものであろう。なおこの像の脚部裏に、「十王堂」「文治二〇」「八月十〇」などの墨書がみられる。

文治二年（一一八六）などの年号が何を意味するのか明確ではないが、これらは後世に書かれたものである。

三、木造地藏菩薩立像

江戸時代

石井家 大字真名畑字向獵師

像高 三七・九cm

一木造 彫眼 現状素地をあらわす

円頂とし、衲衣は左肩を覆い右肩に少しかかる。両足先をそろえて立っている。現在、両手及び両足先を失っているが、各手には宝珠と錫杖を持っていたものと思われる。全体に磨滅しており、特に面部にそれ

が著しく、顔立など見分けがつかない。かろうじて円満なお顔の、輪郭がわかる程度である。

両手首と両足先を刳寄せるのみで、頭から体まで一材で彫出している。内刳はない。前述の菊池家の地藏菩薩像と同様、素朴な作風の像である。両肩より垂下する襟の線は直線的に処理され、彫りも浅い。また背面は何も刻まず、簡略な表現が目立つ。在地の仏師によってつくられたものと考えられる。

この像は、石井家の地藏堂の本尊である。この堂は八軒堂の一つといわれている。八軒堂とは、真名畑の開拓に八軒の家が入り、各戸が一堂を守ってきたことに由来するといふ。現在では、この像は、安産や子育てなどの信仰を集めている。